

2026—(A)

◆ 国 語 問 題

13：00～14：15（75分）

受験についての注意

1. 試験開始の合図があるまで、問題を見てはいけません。
2. 国語の試験用紙は、問題用紙1部（16ページ）、マーク式解答用紙1枚から構成されています。過不足があれば監督者に申し出てください。
3. 試験中に試験用紙の印刷の不鮮明、ページの欠落、乱れおよび解答用紙の汚れなどに気づいた場合は、監督者に申し出てください。
4. 監督者の指示に従って、マーク式解答用紙の受験番号の記入欄に受験番号を1カ所記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。また、氏名欄に氏名を1カ所記入してください。
5. 解答はすべてHBの黒鉛筆またはHBで0.5 mm以上の芯のシャープペンシルで記入してください。
6. 解答用紙は丁寧に取り扱いってください。
〈マーク式解答用紙は折り曲げたり、破ったり、汚したりしないよう、特に注意してください。〉
7. 解答は解答用紙の各問指定の枠内に記入してください。解答用紙の裏面にはいっさい記入してはいけません。下書きなどには問題用紙の余白を利用してください。
8. 解答中以外の解答用紙は必ず裏返しに置いてください。
9. 受験中は不審な行動をとってはいけません。不正行為があれば当該年度の全入学試験を無効とします。
10. 試験時間の途中で退場することはできません。
ただし、気分が悪いなど身体の調子が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に申し出てください。
11. 試験終了の合図と同時に解答をやめてください。
12. 問題用紙は試験終了後、持ち帰ってください。

マーク式解答用紙の記入上の注意

1. 受験番号の記入方法

受験番号は受験番号欄にアラビア数字で記入のうえ、受験番号マーク欄に下の例に示すようにマークしてください。

〔例〕受験番号が00012番のときは、

受 験 番 号					
P	0	0	0	1	2
	万位	千位	百位	十位	一位
	0	0	0	0	0
	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

2. マークの記入方法

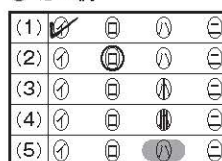
次に示す㉔「正しい例」のようにマークし、㉕「悪い例」のようにマークしてはいけません。

㉔ 正しい例



例えばロと解答したい場合、
ロのマーク枠の中を完全に
ぬりつぶしてください。

㉕ 悪い例



✓印をつける

○印でかこむ

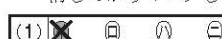
線を引く

ぬりつぶしが不完全

範囲をおおきくこえる

このような
マークをし
てはいけま
せん。

3. 一度記入したマークを訂正する場合、消しゴムで完全に消してからマークしなおしてください。



左図のように×印をつけても
消したことはありません。

4. 正しくマークされていない場合、採点できないことがあります。

解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子どものころ、あれは昭和三十年以前のことだったろうか、老人が唇をわずかに動かしながら本や新聞を読んでいるのを、電車のなかなどでよく見かけた覚えがある。いかにも年寄りじみた様子に感じられたが、それが音読の習慣のかすかな名 I であることに思い至ったのは、ずっと後になってからのことだ。

前田愛は、明治時代の家庭におけるごく一般的な読書風景が、たとえば小説を音読する読み手の声に、家族みなで耳を傾けるという、共同的な享受の仕方によるものであったことを、同時代の人々の日記や回想の一節を例に引きながら論じている。小説は個人的に鑑賞されるものというより、家族共有の教養の糧、娯楽の対象として考えられていたらしい。このことは、一家団欒をおもんじる日本の「家」の生活様式（ラフカディオ・ハーンがいうように、それはブライヴァシー^②というものを欠いていた）、この時代のリテラシー^①の水準の低さ、戯作文学の民衆演芸的性格などの諸条件にもとづいていたとされる。夕食の後の一家団欒のひとときに、一人が草双子や小説、小新聞のつづきものなどを読み上げ、それに家中そろって耳を傾けるというのは、明治時代の家庭におけるごくありふれた光

景だったようだ。

世代にわたるゆるやかな時間の流れのなかで、音読にまじって、次第に黙読の習慣が定着していく。その背景には、活版印刷という技術が可能にした、書物の広範な普及があったことはいまでもない。黙読の普及は当然、読書という行為の内実をも変化させる。ごく近年まで、小説の読書を好ましいものとして受け入れようとはしない家庭が少なくなかったが、それは小説自体の影響力とは別に、小説とともにひとりの世界に閉じこもることが、家族全体の連帯感を疎外する行為を意味したためではあるまいか、という前田愛の指摘は興味深い。実にこの黙読の成立こそが、自己の内面を通して本と向きあい、作者ないし作中人物に同化を遂げる、近代の孤独な読者の誕生を告げるものだった。

『孤独な群衆』の著者として知られる、D・リースマンは、ピューリタニズムとの関連において黙読の習慣をとらえようとした。印刷術の発明された十五世紀以降も、書物は長いこと、ひとりで読むときですら、声をあげて朗読されていた。そのことは、(ジョンソン博士が辞書を編纂して、正字法の統一を図るまでは)文字が発音通りにそれぞれ勝手に綴られていたことにもうかがわれる。【A】十八世紀になって、ピューリタニズムのもとに、個人的、内面的な読

書の仕方が一般化されるようになって初めて、声を出さない内密な読み方が行なわれるようになった。書物は外への扉と同じく、内への扉をも開いたのだ。

ところが、先ごろ邦訳の出た『記憶術と書物』のなかで、メアリー・カラザースは、以上のような、黙読が音読に取って代わったという近代に視点をすえた定説にたいして、^a疑いをさしはさむ。古代においても、ⅡとⅢは並行して行なわれ、^{レクテイオ}勉強と瞑想^{メディタチオ}という学習過程のふたつの段階に対応するものであったとしている。すなわち、勉強の後の段階である瞑想では、文章を記憶にしっかりと刻みつけ、それを咀嚼^④して完全に自分のものにするために、黙読が行なわれたというのである。

確かに、中世以前にも、黙読の事例は存在した。^⑤社会的習慣として捉える見方からしばらく離れ、これを個人的な技量と考えてその事例をひろく^⑥シヨウ猟^⑥していくなら、もうひとつ別の流れが見えてくることは確かだろう。

黙読のことを明らかにしたヨーロッパ文学の初めての作品と^イは、^イ聖アウグスティヌス（三五四―四三〇）の『告白』とされている。修辞学の教師としてミラノに赴いた二十代のアウグスティヌスが、師として学んだ^ロ聖アンブロシウスの読書する姿を描いた次の一

節は、しばしば引用される。

「かれが書を読んでいたとき、その眼は紙面の上を馳せ、心は意味をさぐっていたが、声も立てず、舌も動かさなかった。しばしば、わたしたちがかれのもとにいたとき――だれでもはいつて差支えなく、来客を取り次ぐ習わしでなかったのだ――かれはいつもそのように黙読していて、そうしていないのを見たことは一度もなかった。そしてわたしたちは、長い間黙ってすわっていた――このように^ハ熱中^ハしている人をどうしてわずらわそうとするものがあるだろうか――のち、そこから出て、こう推測するのであった。すなわち、かれは、他人の仕事のさわがしさに煩わされない自然の精神の保養のために得たその短い時間中に、また別の仕事に呼び戻されたくないであろう。また、おそらく、かれがその書を読んでいる著者がなにか不明瞭なことを述べていると、^ニ熱心に注意深くそばで聞いているもの^ニのために、それを説明し、あるいはもつとむつかしい問題について議論することも必要となつて、このような仕事に時間をとられ、^ホ自分が思うほど多くの書をひもとけなくなることを用心しているのだらうと。もつとも、かれの声はしわがれがちであったので、声を大事にすることもまた、そしてその方が黙読のほんとうの理由であったかもしれない。しかしどういふ心づもりで黙読していたに

せよ、かれが^⑦そうしていた心づもりは正しかったのである。」

この時代、声を出さない読み方は、若いアウグスティヌスにとつてさえ、思いがけない秘術を目にしたときのような驚きだった。

Ⅳ、黙読の記録がこれ以前にまったくなかったわけではない。視力を失った^{*}ボルヘスのために、若いころに本を朗読する役をつとめたことのあるアルベルト・マンゲルは、その『読書の歴史』のなかで、古代における黙読と思われる例を幾つもあげている。

すでに紀元前五世紀に、黙読とおぼしき情景を描いた二つの戯曲がある。エウリピデス（前四八〇頃—前四〇六）の『ヒッポリュトス』では、テセウスが亡くなった妻の手に使っていた手紙を声を出さずに読む。アリストファネス（前四四五頃—前三八五）の『騎士』では、デモステネスが神託の記された書き板を見て、書かれてあることにⅤ 狼狽するが、一言も発しない。プルタルコス（『対

比列伝』によれば、マケドニア王アレクサンドロス（前三五六—前三二三）は、母からの手紙を声を出さずに読んで、なみいる兵士たちを驚かせた。【B】一二世紀前半の天文学者プトレマイオスは、その著書のなかで、注意を集中しようとするときには、しばしば声を出さずに読む、言葉を口にすると、考えの妨げになるからだと述べている。おもしろいのは、ユリウス・カエサルが紀元前六三年、元

老院において、政敵であったカトーの傍らに立ったまま、そのカトーの妹から送られた恋文を黙って読んでいたと、プルタルコスが『対比列伝』のなかに書いていることだ。その四世紀ほど後、エルサレムの聖キリルは、三四九年の四旬節に行なった説教のなかで、教会につどつた女性たちに、儀式で待機しているあいだには読書をしてはどうかと勧めている。ただし、声が聞こえないほどひっそりと読むようにと言っている。唇は動かすが、かすかにささやくような読み方だったのだろう。

それにしても、音読が^⑤ジヨウ態であったとするなら、あの伝説的なアレクサンドリアの図書館も、今日想像されるように、^④荘チヨウな静けさが支配する場であったとは考えにくい。無数の声の織りなす、どよめくがごときざわめきに包まれていたのだろう。【C】

音読とは、言語に対するこの時代の人々の意識のあり様に深く根ざしたものだ。羊皮紙やパピルスに記された文字は死んだ記号でしかなく、それは声を得てはじめて生きた言葉となる。文字は^⑥この場合、視覚的な記号というよりも、音声^⑥を直接喚起するものだった。ことに聖書のような聖なる言葉を読むとき、目にふれた文字は必ず声となつて発現し、全身がその気に満たされる思いがしたのである。

それはまた、書記法とも関係することだった。古代の巻物に記された文字は、句読点もなく、単語の切れ目も大文字と小文字の区別もなく、びっしりとすき間なくしるされてあった。これを読むときには、声に出して一語一語を分節しながら読み進めなければならず、黙読はしばしば誤読をおかすことになった。【D】二世紀頃、ビザンツのアリストファネスの創案にかかるとされてきた句読法が行なわれ、それは時代とともに徐々に発展をとげていった。黙読を容易にするような方向へと、書記法は整えられていったのだった。九世紀のはじめ、修道院での読書では黙読が普通となったので、写字生は読み取りに便利のように、単語を分かち書きするようになった。また、修道院の写字生に、書き写す文章を声に出すことなく静かに仕事をするようにという規則が初めて課されたのが、九世紀のことだった。【E】

セーリヤのインドル（五六〇頃―六三六）は、黙読の効用として、読んだことについてじつくりと考えることを容易にし、またそれが記憶から失われにくくする、としている。そして読書とは、時間と空間を越えての【VI】を可能にするものであり、実際の【VI】とは異なり、文字はその場にはない人の言葉をも静かに伝えてくれるものだ、とその著書に記している。これは、黙読とい

う技量に熟達した者の言葉といえよう。

（鶴ヶ谷真一「黙読」より）

（注） *ピューリタニズム：イギリスの清教徒（ピューリタン）の思想。

*ボルヘス：二十世紀ラテンアメリカ文学を代表する作家。
*アレクサンドリアの図書館：古代エジプトの都市アレクサンドリアに存在した大図書館。

問一 傍線部①、②、③、④、⑤のカタカナの部分に漢字で書いたとき、傍線部に同一の漢字を使うものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

- ① 疑ギ
- イ 婚礼のギに参列する
 - ロ ギ証罪に問われる
 - ハ 判決に抗ギする
 - ニ 講ギに参加する
 - ホ ギ態語を多用する

㉑ ショウ 獵

- イ ショウ康状態を保つ
ロ 友人に画家をショウ介する
ハ 年齢不ショウの画家
ニ 価格交ショウを引き受ける
ホ 在庫の有無をショウ会する

㉒ ジョウ 態

- イ 詐欺師のジョウ套句に騙される
ロ ジョウにほだされる
ハ 逆ジョウして理性を失う
ニ 囲碁のジョウ石を研究する
ホ 礼ジョウをしたためる

㉓ 荘チヨウ

- イ 悪人がチヨウ梁跋扈する
ロ チヨウ刻作品を制作する
ハ チヨウ戒処分を受ける
ニ 捲土チヨウ来を誓う
ホ 格チヨウ高い文章

㉔ 喚キ

- イ キ急の知らせ
ロ キ死回生の一手
ハ キ丈にふるまう
ニ キ画を立案する
ホ 正確をキす

問二 次の一文が入るべき場所はどこか。最も適当なものを問題文中の【A】～【E】から一つ選び、その符号をマークしなさい。

黙読が一定の普及をみたことを示すものだろう。

問三 空欄Ⅰ、Ⅴに入る漢字として、最も適当なものを次のイ～トからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい（同じ符号を二回用いてもよい）。

- イ 折 ロ 勝 ハ 犬 ニ 代
ホ 狼 ヘ 残 ト 老

問四 傍線部①「リテラシイ」、④「咀嚼」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

① リテラシイ

- イ 社会情勢についての知識
ロ 主体的に課題に取り組む能力
ハ 文化芸術についての知識
ニ 読み書きをする能力
ホ 論理的に思考する能力

④ 咀嚼

イ 噛み砕くこと

ロ 切り刻むこと

ハ 切り裂くこと

ニ 吸い込むこと

ホ すり潰すこと

問五 傍線部②「戯作文学」とあるが、江戸時代の戯作文学の例として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 泉鏡花『高野聖』

ロ 十返舎一九『東海道中膝栗毛』

ハ 小林一茶『おらが春』

ニ 近松門左衛門『曾根崎心中』

ホ 尾崎紅葉『金色夜叉』

問六 傍線部③「黙読の普及は当然、読書という行為の内実をも変化させる」とあるが、ここでは黙読の普及によって読書という行為はどのように変化したというのか。その説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 演芸的なものから文芸的なものへと変化した

ロ 家庭的なものから社会的なものへと変化した

ハ 共同的なものから個人的なものへと変化した

ニ 娯楽的なものから学術的なものへと変化した

ホ 受動的なものから能動的なものへと変化した

問七 空欄Ⅱ、Ⅲに入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次のイ～ヘから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ Ⅱ……記憶 Ⅲ……黙読

ロ Ⅱ……記憶 Ⅲ……音読

ハ Ⅱ……音読 Ⅲ……黙読

ニ Ⅱ……音読 Ⅲ……想起

ホ Ⅱ……黙読 Ⅲ……音読

ヘ Ⅱ……黙読 Ⅲ……想起

問八

傍線部⑤「社会的習慣として捉える見方」とあるが、読書行為を「社会的習慣として捉える見方」として、問題文ではどのような例が挙げられているか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 明治時代において黙読は家族関係を分断する危険な娯楽と見なされていたために普及しなかったという見方
- ロ 黙読の習慣は一家団欒をおもんじる日本の「家」の生活様式への反発から生まれたという見方
- ハ 黙読の習慣は十八世紀になってから、ピューリタニズムとの関連において成立したという見方
- ニ 音読の習慣は活版印刷術の発明とともに終焉を迎えたという見方
- ホ 書物をひとりで読む習慣は正字法の統一によって初めて可能になったという見方

問九

傍線部⑥「もうひとつ別の流れが見えてくる」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 黙読の習慣が中世以前から連綿とつづいていたという「流れ」とは別に、近代以降に黙読が音読に代わって広く慣例的におこなわれるようになったというもうひとつの「流れ」が見えてくるということ
- ロ 黙読の習慣が中世以前から連綿とつづいていたという「流れ」とは別に、中世以前には音読が広く慣例的におこなわれていたというもうひとつの「流れ」が見えてくるということ
- ハ 黙読が近代以降に音読に取って代わったという「流れ」とは別に、黙読はすでに中世以前から広く慣例的におこなわれていたというもうひとつの「流れ」が見えてくるということ
- ニ 黙読が近代以降に音読に取って代わったという「流れ」とは別に、黙読は中世以前から男性知識人のあいだで秘術として脈々と受け継がれてきたというもうひとつの「流れ」が見えてくるということ
- ホ 黙読が近代以降に音読に取って代わったという「流れ」とは別に、黙読はすでに中世以前から一部の人々のあいだでは実践されていたというもうひとつの「流れ」が見えてくるということ

問十 傍線部⑦「かれ」と同じ人物を指示しているものを、波線部イゝホからすべて選び、その符号をマークしなさい。

問十一 空欄Ⅳに入る言葉として、最も適当なものを次のイゝホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ しかし

ロ このように

ハ だから

ニ たとえば

ホ なぜなら

問十二 空欄Ⅵ（二ヶ所）に入る言葉として最も適当なものを次のイゝホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 内省 ロ 考証 ハ 講和

ニ 生存 ホ 対話

問十三 問題文の内容と合致するものを次のイゝトから二つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 前田愛とD・リースマンは、ともに近代において黙読の習慣が定着した要因のひとつとして活版印刷術の発明を挙げている。

ロ 前田愛とD・リースマンはともに読書という行為を社会的習慣として捉えたうえで、黙読の習慣が音読の習慣に代わって成立したことを主張している。

ハ メアリー・カラザースは書物が古代から広範に普及していた点に注目して、黙読の習慣が近代において成立したという定説を覆した。

ニ みずからの読書体験を記したアウグスティヌスの『告白』は、黙読について記したヨーロッパ文学史上初めての作品と見なされている。

ホ 視力を失ったボルヘスのために朗読者の役割を務めたことのあるアルベルト・マンゲルは、『読書の歴史』のなかで朗読の効用について指摘している。

ヘ アリストファネスは単語の切れ目を明確にするために単語を分かち書きにする方法を考案し、書記法の発展に大きく貢献した。

ト 読者が読んだ本の内容を記憶し、その内容について深く考察するためには、黙読が効果的であるとイシドーは述べている。

二 一次の文章は『別本八重葎』の一節で、邸の端近で姫君が琴を弾いている場面から始まる。姫君は、故あつて都を離れていた男君（大將の君）から何の音沙汰もないことを心細く思いながら過ごしていた。これを読んで、後の問に答えなさい。

* 老人ども、「いで、例ならぬ御端居かな。むくむくしき夜なるに、

風邪などもこそひかせたまへ。かう荒れにたるところは、鬼などいふもののありて、めでたてまつるやうもぞある」と、言ひあつかふ。

げにいと悩ましくしたまひて、臥させたまふに、御手なども熱くなり^②にけめ、人びと御あたり去らず居て、御湯などまゐらするほどに、前驅^②の声忍びやかにて、こなたさまに来るものあり。「あはれ

大將の君の御氣配思ひ出でらるるや」「なぞの車にかあらん」など、言ふ。

ただこの南面にさし寄せて、声づくるなれば、覗き見るに、

X 姿の見知れるやうなるは、大夫なりけり。思ほえずめづ

らしきにも、古りぬる人はいとどひとつ涙ぞとどめがたかりける。

咳^{しは}きがちに、「あな嬉し。捨つまじかりける命かな。あが君のか

くておはしますを、この世に待ちつけたてまつらんとやは思ひつる。夢にやあらん。さりとて、しばし覚めでをあれよ」など、もの

くるはしげに言ひしろふを、侍従も聞きつけて、こなたに出で来たり。

御前などもありながらなるを、「あやしう、さてもいつばかり

か都には帰らせおはしましつる。かう人疎^{ひだろ}き葎の門にのみ閉ぢられて侍れば、さる御響きも承りはべらぬに、かくておはしますを見たてまつるにも、なほ現とはおほえはべらず」とて、うち泣く。

御車は、少し退きて、蓬の露乱りがはしきに立ちたり。大夫ぞ

Y に尻かけて語らふ。「この一昨日にぞ朝廷^{おほやけ}の御許しかうぶ

らせたまひつる。昼などは、なほ慎ましう思しめしたれば、かく夜深^{*}う振^はり延へおはしますなり。らうがはしからぬ御座所設けさせた

まへ。姫君などか出でさせたまはぬ」と、言ふに、「げに埋^{*}もれいたきもいか」とて、入り来て^{そそのか}唆しきこゆれど、宵より物の怪おこ

りたまふやうにて、悩ましきに、さらに人の氣配もむつかしとて、うちも身動^{みじろ}きたまはねば、とかくしあつかふほどに、大夫うちむつ

かりて、「かく訪ひおはしましつるを、いかがは。姫君の御氣配聞

かせたまはぬほどは、さらに御車よりもさし出でさせたまふまじくなん」と、言ふに、老御達ども、「いで憎の御心や。かうありがた

き御心ざしを見る見る、ただにやは帰したてまつりたまふべき。つひに身の御幸ひ待ち出でたまふまじき御ひがひがしかな」など、

⑧ まがまがしう言ひ嘆く。

侍従などの入り来て、言ひあつかふをも、「あなかま」とて、聞き入れたまはねば、「物の憑きたてまつりて、ひたぶることを言は^⑨せたてまつるなめり」とあきれたる心地す。

とかくやすらふほどに、「夜明けはべりぬべし。^⑩はしたなくなりては便なきわざなるを、明日の夜さりこそまうでたまはめ」とて、

御車にもさやうにとり申せば、「いかがはせん。めづらしき御心ざしを^{*ふす}燻^{がほ}べ顔ならんも、やがて絶えはてたまひぬべきにや」とあやふくて、侍従なども思ひ乱れたり。

(『別本八重律』より)

(注) *老人ども…姫君に仕える老女房たちを指す。後の「古りぬる人」「老御達ども」も同様。

*大夫…大将の君の従者。

*侍従…姫君に仕える侍女。

*振り延へおはしますなり…わざわざいらっしゃるのだ。

*埋もれいたき…引つ込み思案が過ぎる。

*燻べ顔…拗ねた態度。

問一

傍線部A～Eの語句の意味として最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

A 「むくむくしき」

イ 寒い

ロ 気味が悪い

ハ はかない

ニ もの寂しい

ホ 退屈な

B 「まゐらする」

イ 頂戴する

ロ 召し上がる

ハ お呼びする

ニ ご覧になる

ホ 差し上げる

C 「らうがはしからぬ」

イ 人目に触れない

ロ 仰々しくない

ハ 並々でない

ニ 堅苦しくない

ホ 騒がしくない

D 「ひがひがしさ」

イ 嫉妬深さ

ロ 体裁の悪さ

ハ 不誠実ぶり

ニ 無骨さ

ホ 偏屈ぶり

E 「やすらふ」

イ 横になつてくつろぐ ロ やりとりを繰り返す

ハ 時間稼ぎをする ニ ぐずぐずして止まる^{とど}

ホ 会話を中断する

問二 傍線部①「めでたてまつるやうもぞある」の解釈として最も

適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 鬼があなた様を気に入ってしまうことがあつては困ります。

ロ 鬼があなた様を狙っているようです。

ハ 鬼は私たちに禍いをもたらすことでしょう。

ニ あなた様は決して鬼にさらわれてはなりません。

ホ 眠っていた鬼が目覚めますようなこともあるかもしれ

問三 傍線部②「前駆の声」とは何か。最も適当なものを次のイ～

ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 訪問時の挨拶の声

ロ 邸宅の中を案内する声

ハ 通行人に道をあけさせる声

ニ 女房に取次を頼む声

ホ 車を引く牛の声

問四

空欄Xに入る言葉は何か。左図の二人の人物が着ているような日常の平服を表す語が入るということを参考にして、最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 裳

ロ 唐衣

ハ 束帯

ニ 狩衣

ホ 小袷



問五

傍線部③「捨つまじかりける」の文法的説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 動詞終止形＋助動詞終止形＋助動詞連体形

ロ 動詞連体形＋助動詞連用形＋助動詞連体形

ハ 動詞終止形＋助動詞連用形＋助動詞連用形＋助動詞連体形

ニ 体形

ホ 動詞終止形＋助動詞連用形＋助動詞連体形

ホ 動詞連体形＋助動詞終止形＋助動詞連体形

問六 傍線部④「あが君」とは誰のことか。最も適当なものを次の

イ ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 朝廷 おほやけ

ロ 姫君 ハ 大将の君

ニ 古りぬる人 ホ 侍従

問七 傍線部⑤「あやしう、さてもいつばかりか都には帰らせおは

しましつる」の解釈として最も適当なものを次のイ ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 不思議なことですね、はたして大将の君はあなた様を
いづごろ都に帰らせなさったのですか。

ロ 奇妙ですね、それにしても大将の君はいづごろ都にお
帰りになったのですか。

ハ 意外なことに、大将の君は以前のままのお姿でいつの
間にか都へお帰りになっていましたね。

ニ 変ですね、いったいいつごろ大将の君が自邸にお帰り
になったのですか、まだ帰っていらつしやらな
いはずですよ。

ホ 外聞の悪いことですね、あなた様がいつの間にか大将
の君を都に帰らせてしまわれたのは。

問八 空欄 Y に入る言葉は何か。左図の人物の足元にあるような、

角材を並べて作られた板敷きを表す語が入るということを参
考にして、最も適当なものを次のイ ホから一つ選び、その
符号をマークしなさい。

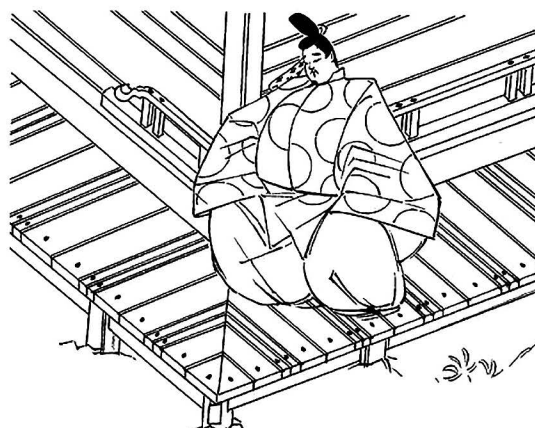
イ 蔀

ロ 簀子

ハ 透垣

ニ 長押

ホ 築地



問九 傍線部⑥「せたまひ」は誰に対する敬意を表しているか。最

も適当なものを次のイ ホから一つ選び、その符号をマーク
しなさい。

イ 大将の君 ロ 姫君 ハ 朝廷 おほやけ

ニ 大夫 ホ 古りぬる人

問十

傍線部⑦「大夫うちむつかりて」とあるが、大夫は何に對してこのような態度を取ったのか。最も適當なものを次のイ、ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 侍従が大夫の求めに應じず、姫君を呼び出そうとしてくれないこと

ロ 姫君の体調不良を理由に侍従が大夫を追返そうとしていること

ハ 姫君が全く動こうとせず、部屋から出てこないこと

ニ 姫君が侍従の呼びかけに全く反応しないこと

ホ 大夫と侍従のやりとりを物の怪が妨げていること

問十一

傍線部⑧「まがまがしう言ひ嘆く」とあるが、語り手は何を「まがまがしう」と評しているのか。最も適當なものを次のイ、ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 大将の君に對し冷淡な姫君を口々に非難する、「老御達ども」の声の大きさ

ロ 自身が仕える姫君に對し、憚らず苦言を呈する「老御達ども」の態度

ハ 無理にでも姫君を大将の君に引き合わせようと躍起になっている、「老御達ども」の焦り方

ニ 姫君が幸福を手にすることはできないだろうという、「老御達ども」の発言内容

ホ 大将の君が姫君に会わないまま帰ることになると告げた大夫に對し、「老御達ども」が向けた非難の言葉

問十二

傍線部⑨「言はせたてまつるなめり」に関する説明として最も適當なものを次のイ、ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 助詞が一つだけ含まれている。

ロ 活用する語だけで構成されている。

ハ 姫君への敬意を表す尊敬語が含まれている。

ニ 促音便を起こした語が含まれている。

ホ 係り結びが起きている。

問三 傍線部⑩「はしたなくなりては便なきわざなるを」の解釈

として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 姫君が煮え切らない態度のままでは埒が明かないので

ロ これ以上滞在するような無作法を働いては申し訳ないので

ハ ここへ通うことが途絶えてしまつては姫君が気の毒なので

ニ 姫君の病気がさらに悪化したら取り返しがつかないの

ホ ここから退出するのが遅れてしまつては具合が悪いので

問四 問題文の内容と合致するものを次のイ～ホから一つ選び、

その符号をマークしなさい。

イ 姫君は、車の音によつて大将の君の来訪を察知した。

ロ 老女房たちは嬉し涙が止まらないため、侍従を呼んで大夫への応対を頼んだ。

ハ 侍従は夜中から明け方まで大夫への応対に当たつた。

ニ 姫君は大夫と面会したものの、全く取り合わない態度を示した。

ホ 大夫が邸からの退出を大将の君に提案しようとしたのを、侍従は遮つた。

問五 『別本八重葎』は『源氏物語』「蓬生」の巻をモチーフとして

作られた作品である。『源氏物語』についての説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 作者は中宮彰子に仕えた女房である。

ロ 現存する最古の伝奇物語である。

ハ 作者は『更級日記』なども著した菅原孝標の娘である。

ニ 『大鏡』や『栄花物語』の記述を引用している。

ホ 『落窪物語』や『宇津保物語』などのモチーフにもなつた。

——— このページは白紙です。 ———